

小峯和明著

『遣唐使と外交神話』

―『吉備大臣入唐絵巻』を読む―

原 克 昭

本学名誉教授・小峯和明氏（以下、慣例に倣って「小峯さん」と呼ばせて戴く）の際限なく拡がりゆく学問体系は、もはや贅言を要しないだろう。二〇一七年秋には、小峯さんの古稀記念をかねた論文集『シリーズ・日本文学の展望を拓く』全五巻（笠間書院）が刊行されたのも記憶に新しい。あらゆる場面において、小峯さんの薫陶を受けた諸氏諸学の論攻が一堂に会したシリーズだが、その全貌はまさしく『小峯ワールド』の投影化・体現化といえるものであった。徹底した文献解説を基調として、周縁の事象と（ときにアナロジー性に富んで）リンクさせながら、新たな視界を提起する。緻密さと柔軟さと大胆さを兼ね備えた研究スタイルに、研究関係者としてのみならず一読者としても魅力を感じるのであらう。

そして、新書版の書き下ろしとはいえ、新刊『遣唐使と外交神話―『吉備大臣入唐絵巻』を読む』もまた、けつして例外ではない。『吉備大臣入唐絵巻』の解説を中核として、遣唐使にまつわる物語群・絵巻類とリンクさせながら、ひろく（外交神話）の世界を描きだした本書には、まぎれもなく『小峯ワールド』が余すところなく開陳されている。各章ごとの内容紹介をかねて、本書の魅力をたどり起こしてみたい。

* * * * *

第一章「吉備真備―人物と文物」では、実態としての遣唐使および吉備真備の実像と虚像から起筆する。本書の主眼は「実証的な遣唐使ではなく、むしろ後代に仮構され、再創造された遣唐使の（像）」（まえがき）にあると銘打ちつつも、井真成墓誌に関する調査報告をはじめ最新の古代史研究への目配りもゆるぎない（その点は、巻末「参考文献」にも反映されている）。予備的考察として遣唐使の実態相を点綴することで、後代に仮構された遣唐使（像）および神話化された吉備真備像がいつそう際立つことを予感させてくれる。

第二章「『江談抄』を読み解く―絵巻へ

の道」では、『吉備大臣入唐絵巻』成立以前にみる物語の展開をたどる。絵巻以前に真備の物語を採録した類聚本系『江談抄』巻三冒頭話の解説を中心とするが、本章は梗概の紹介にとどまらない。よく知られた『江談抄』当該話を他章段とつきあわせて読みなおすことで、大江匡房をとりまく当時の談話の現場を復元し、『野馬台詩』の位相を再定位してみせる。その過程では、オオクニヌシ神話と対比させながら（外交神話）としての特性をあぶりだすなど大胆な解釈も試みる一方で、『文選』「困甚」『野馬台詩』にわたる難題克服と真備の術をめぐるモチーフのうちに（解説）という隠された裏テーマを再発見する。「試していたのは真備の方で、中国側こそ試されていたとみるべきであろう」との指摘に表徴されたとおり、たえず読みの更新をはかりつづける本領が見え隠れして読み応えがある。

そして、第三章「吉備大臣入唐絵巻」の形成と世界」において、いよいよ本題にいきなわられてゆく。『伴大納言絵巻』『彦火火出見尊絵巻』とともに、後白河院によって制作された三大絵巻として著名な『吉備大臣入唐絵巻』。とりわけて『吉備大臣入

唐絵巻』は伝来や錯簡など、いまなお謎多き絵巻である。それゆえに、文学研究のみならず日本史・美術史・文化財学など諸学域からアプローチした研究蓄積も分厚い。

本章では、「東アジアの緊張克服もしくはあらたな日宋交流のための外交神話として、さらには百王思想の終末観の危機感から」制作された絵巻と位置づけ、おもだった先行研究に言及しつつ、さらなる読みの可能性を多発的に提起する。詞書は先行する『江談抄』『吉備大臣物語』との三者比較を通して、絵画に関しては宮殿・中門・楼閣の建築三点セットに注目した画面構成、真備・鬼の仲麻呂・宝誌・異国の帝王や使者をめぐる人物形象の観点から丹念に再検証をはかる。絵画を読むとはどういうことか、絵画と詞書・話素をどう重ねて読み解くか、著者の提唱する〈絵画物語〉論（『シリーズ・日本文学の展望を拓く』第二巻・「絵画・イメージの回廊」巻頭論文など参照）の入門的実践として大いに参考となる。また、その論調は必ずしも性急に結論を求めるわけではなく、あらゆる読みの可能性を提示するかたちで貫徹されている。結論を欲する立場から見ると、いささ

か物足りなさを感じる場面があるかもしれないが、むしろ当該絵巻のさらなる魅力を引き出した段階であえて留保している意図を斟酌したい。げんに著者自身、当該絵巻に「外交起源譚」「御霊絵巻」としての性格に加えて、新たに「予言書起源の視覚化」というもうひとつの側面をみいだすなど、自説を更新させる試みがなされており、今後の議論が期待されるころでもある。

つづく、第四章「遣唐使の神話と伝説」では、ふたたび遣唐使へと視点を移し、さほど歴史学では問題化されない廃止後の「対象化された、幻想化された遣唐使〈像〉」の探求へと仕向けられる。『竹取物語』から『松浦宮物語』におよぶ王朝物語、『宇治拾遺物語』にみる中世説話、さらに近世の仮名草子・草双紙をひとつずつひもときながら、十世紀以降にみる「遣唐使の記憶」を丁寧に掘り起こす。「遣唐使という符牒」で語られていた物語から、真備・仲麻呂を焦点化した物語への展開相をたどり起こす趣向は、さながら一箇の〈文学史〉の様相を呈している。その延長線上に近代の吉備真備顕彰や現代の地元環境志向を見据えつつ、古典世界と近現代をきり

むすぶ。さらに、本書の射程はとどまるところを知らない。

終章「東アジアの回路へ」の前半部では真備の物語と新羅・崔致遠の物語との対比論、後半部では異国異域との文化交流を主題とした絵巻群に『吉備大臣入唐絵巻』を再布置する絵巻論を通して、对中国意識や異国異境幻想からくる「劣等感と優越感がないまぜになった東アジア文化交流」のありようをあぶりだす。かねてより東アジアにおける〈漢字漢文文化圏〉論（『シリーズ・日本文学の展望を拓く』第一巻「東アジアの文学圏」巻頭論文など参照）を提唱し、『新羅殊異伝』『釈氏源流』を手懸けている著者の本領發揮といえようか。古代日本に特化しがちな遣唐使研究への一種の警鐘としても響いている。

新羅の文人でありながら中国の科挙に合格し、のち帰国を果たした崔致遠もまた真備と同様、後代に伝説化した人物として知られている。真備の物語とおなじく中国皇帝からの難題モチーフをあわせもつ崔致遠ゆかりの物語文献を博搜し、人物設定や細部の描写など真備との位相差を見極めつつ、小国の日本・朝鮮が大国中国に対して

「一矢報いる物語」として「現実の劣等感克服」に必要な物語であったという共通性を読みとる。一見、文学研究に特有な類比に感じられるかもしれないが、このような見解が説得力をもつのは、ひとえに著者の小峯さん御自身が積極的に現地へ赴き、実地踏査によって裏打ちしているからにはかならない。著者自身は「啓示に近い機縁」（「あながき」と謙遜を表すが、文学研究を追体験する姿勢は斯学を志す後学にとつて学ぶべきところ大である（とはいえ、だれもが真似できる営為でもないかもしれない）。

さて、後半部は〈異文化交流〉をテーマとする絵巻群から改めて『吉備大臣入唐絵巻』を再定位した絵巻論である。鑑真伝を描いた『東征伝絵巻』では、鑑真の行状から真備・仲麻呂との接点を確認した上で、絵巻の中に描かれた遣唐使船の群像に東帯姿の真備を発見する。東帯姿の形象は、すでに本書第三章でも論及されており、本論部との連繋が効いている。その他、遣唐使にかかわる『弘法大師行状絵詞』ほか、『華嚴宗祖師絵伝』『玄奘三蔵絵』を採りあげ、『外交神話』から〈異文化交流〉の諸相を

くりひろげる。いささか概略的な感もあるが、『吉備大臣入唐絵巻』との構図や人物形象の類似性の指摘など、著者ならではの絵巻研究の炯眼が光ってみえる。かくして、東アジアをとりまく遣唐使の課題は、古代日本のみならず朝鮮、さらに渤海・遼・契丹・ベトナムへと興行きと拡がりをみせる予感を読者に期待させながら本書のむすびとなる。けつして完結することなく、むしろ余韻と予感を漂わせつつむすぶあたりも、『小峯ワールド』の魅力のひとつである。

* * * * *

本書の志向は、歴史学的実証的な視座で捉えられがちな遣唐使を、あえて「幻想」として捉え返すことで、前近代から近現代へと連なる仮構の遣唐使（像）を描きだした点、往々にして絵画分析に傾注しがちな『吉備大臣入唐絵巻』をはじめとする各種絵巻群を言説と絡めて解説することで、ひろく東アジアを環流する〈外交神話〉ひいては〈異文化交流〉として再構築した点にある。本書を通して、二十一世紀を生きるわたしたちに「幻想の遣唐使」を追体験させてくれるかのような古代ロマンを味わうこともできるだろう。また、多彩な図版や

写真、巻末の参考文献リストも充実しており、新書版入門書以上の質量を兼ね備えている。まさに「ポケットに『小峯ワールド』を！」——本書への身勝手な私家版帯コピーとして添えておきたい。

ちなみに、本書「あながき」によると、集英社新書シリーズ〈本と日本史〉②の当該企画は、もともと古代史研究を基盤に広範な博識と俊敏なフットワークで知られた故・増尾伸一郎さん（東京成徳大学教授・立教大学兼任講師）に依頼されたものを、小峯さんが引き継いだ形で上梓されたとのことである（御両人の親密な学術交流もようは『リポート笠間』五十七号「追悼・増尾伸一郎」知と学の〈鍋奉行〉を参照）。二〇一四年夏、はからずも俄かに鬼籍に入ってしまった増尾さんとその遺志を引き継いだ小峯さん——その両泰斗のすがたに、はるけき一千年以上を隔てた阿倍仲麻呂と吉備真備——両者の幻影を重ねあわせてくなるのは私だけであろうか。

（二〇一八年五月 集英社 二二二頁 七四〇円＋税）

（はら かつあき 弘前大学准教授／前本学助教

新刊紹介

小峯和明監修／金英順編

『シリーズ 日本文学の展望を拓く』

第一巻 東アジアの文学圏

大竹 明 香

本書は、「シリーズ 日本文学の展望を拓く」の第一巻である。

本シリーズは全五巻からなり、東アジア、絵画・イメージ、宗教、文学史、資料学という五つの主題から構成されている。緒言によれば、日本文学を「世界へ、次世代へ、諸学術領域へ発信し、今日的な状況を多方向へと繋ぐ道を切り拓いていく」という意識のもと、日本文学研究に携わる、国際色豊かな計一〇名の論者たちの論稿が収められている。

本書『東アジアの文化圏』は、論文二編、コラム六編からなる。本書の言う「東アジア」とは、漢文化を軸に緊密に関わり、相互に影響する、中国、朝鮮半島、日本、琉球、ベトナムの、文化・文学に主眼を置くものである。そのため、本書の論稿の内容、問題意識なども、国際色豊かなも

のとなっている。以下、本書の内容を大まかに紹介したい。

金英順氏の総論では、漢文化を主軸にまとめられた文化圏について、一対一の関係性ではなく、複合的な視点や方法論をもって考えることの必要性があることが指摘されている。

第一部「東アジアの交流と文化圏」には、四編の論稿と三編のコラムが収められている。小峯和明氏は、「訓読」が「漢字漢文化圏」のひろまりに重要な意味を持つことを指摘し、瀟湘八景をとおして、琉球、朝鮮半島、ベトナムにおける「八景」について言及する。丁莉氏は、『竹取物語』に描かれる求婚難題譚から、渡航や陸・海のシルクロードなど、背景に人と物の交流の様子的あることを浮かびあがらせる。金鍾徳氏は、『源氏物語』に用いられる「高麗」との描写について、作者が生きた時代における人と物の交流から、日本と朝鮮半島との関係性を再検証する。何衛紅氏は、仏教に東アジアの交流の視座を置き、『万葉集』に見える「方便海」の解釈について、『万葉集』が成立した上代びとの視座から考える必要性について指摘する。張龍

妹氏は、『平家物語』や『太平記』などの軍記物語に描かれる「文事」について、その描出に見られる特徴について言及する。於国英氏は、佐藤春夫の『車塵集』における漢詩翻訳の特徴について、訳出における和語と漢詩語の関係に着目する。趙力偉氏は、中国の「山陰」（会稽山）の語が、日本における歌語として成立した背景と、「山陰」の歌語の流行する様相を浮かびあがらせる。

第二部「東アジアの文芸の表現空間」には、六編の論稿と一編のコラムが収められている。井上亘氏は、『楚辞』離騷編から楚人文化に着目し、日本の亀卜書の記述が、『楚辞』離騷編に見える卜筮に通ずることを指摘する。馬俊氏は、『日本書紀』にのみ見られる逸文「百濟三書」の一部の文体表現について、その特徴を言及する。龍野沙代氏は、韓国の金剛山にある普徳窟にまつわる縁起について、特に観音菩薩の聖地として、その伝承の変容の様相をたどる。なお本書では、保郁「普徳窟事蹟拾遺録」の資料が掲載されている。蔣雲斗氏は、『剪灯叢話』がアジア諸国に広く享受されていることに着目し、中国国家図書館所蔵一二

巻本『剪灯叢話』が浅井了意の『伽婢子』の典拠となる可能性について言及する。染谷智幸氏は、これまで作品の印象や評価に乖離のあることが問題であった、朝鮮の古典小説『九雲夢』の評価について、仏教の曼荼羅の観相の視点から作品を捉え直すことを提起する。河野貴美子氏は、日本と中国の文学や小説にまつわる状況から、『遊仙窟』を例に、古典籍をとりまく二重の図書分類の併存する学術状況について検証する。金文京氏は、高麗末期に貢女として送られ、やがて順帝の皇后となった奇皇后がフィクション化される過程で、『釈迦如来十地修行行記』からの影響を受けている可能性を指摘する。

第三部「東アジアの信仰圏」には、五編の論稿と一編のコラムが収められている。金英順氏は、『百喻経』の譬喩の中国、日本、韓国における伝来や、異なる受容の様相について考究する。千本英史氏は、『今昔物語集』の編纂資料としての『弘誓法華伝』について、両者の距離を見定めながら、東大寺本『弘誓法華伝』の書写者について言及する。松本真輔氏は、朝鮮半島における仏教信仰について、特に留学僧慈蔵の伝

記における、天竺の有する意味について指摘する。佐野愛子氏は、大超の『禪苑集英』に記された僧侶に焦点を当て、彼らを語る伝の記述から、大越における仏教史の特徴について指摘する。鈴木彰氏は延命寺蔵涅槃図について、仏伝図や画像モチーフに着目し、作品の成立した背景を浮かび上がらせる。金賢旭氏は、能「加茂」について、作者金春禅竹の中にある秦氏の末裔としての意識の表出という点に着目する。

第四部「東アジアの歴史叙述の深層」には、六編の論稿と、一編のコラムが収められている。高兵兵氏は、長安への古代日本の憧憬の様相について、主に漢詩文を対象として浮かび上がらせる。木村淳也氏は、『古事集』の漢字表記部や記載順などが、蔡温本『中山世譜』「琉球輿地名號會記」の記述と類似することを指摘する。島村幸一氏は、琉球王府の史書『球陽』と「順治康熙王命書文」との関係を比較し、『球陽』の性質について言及する。ファム・レ・フイ氏はベトナムに現存する古説話「神鐘」が越境して広がったことに着目し、「神鐘」説話のルートや背景について言及する。また、本書では、ファム・レ・フイ氏、チャ

ン・クアン・ドック氏による「思琅州崇慶寺鐘銘并序」の資料を掲載する。樋口大祐氏は、日清戦争に関する小説や演劇をとおして、言葉の二重構造について指摘する。再毅氏は中国における「瀟湘八景」のルーツや、元時代に興った、「八景」をその土地の文化のシンボルとしていく動きについて指摘する。エリン・L・ブライトウェル氏の論稿は英文で書かれている。総論によると、『唐鏡』に描かれている「唐」の様相について「指摘した論文という。

以上、本書の内容を大まかに述べてきた。小峯和明氏の「あとがき」には、本書を含めたシリーズ五つの枠組みについて、それぞれが他の巻とも「有機的につらなり合って大きな潮流となっていく」と述べられている。たとえば、本書第三部「東アジアの信仰圏」に収められた論稿やコラムは、総論で述べられているように、シリーズ第三巻「宗教文芸の言説と環境」との深い関連がある。また、鈴木氏の論稿は第二巻「絵画・イメージの回廊」と、木村氏、島村氏の論稿は第五巻「資料学の現在」と、それぞれに繋がる重層的なテーマを有している。本書は「東アジアの文学圏」をテーマ

に編まれているが、そこには「漢字」「漢文」からなる「文化」を共有する意識があり、これは、第二巻、第三巻、第四巻、第五巻へと続いていく大きなテーマとなる。

「東アジアの文化圏」についての多彩な論考に触れることのできる本書を、ぜひ多くの方に手に取っていただきたい。

(二〇一七年一月一〇日 笠間書院 A5判 四九六頁 本体九、〇〇〇円(税別))
(おおたけ あかり 本学大学院博士後期課程)

小峯和明監修 出口久徳編

『シリーズ 日本文学の展望を拓く
第二巻 絵画・イメージの回廊』

河合 恵

本書は、絵画・イメージに関する研究の現在と、未来への展望を示すものである。十五名の論文と、八名によるコラムからなるからなる本書を手にした読者は、その書名の通りに絵画・イメージに関する多様な世界を巡ることができる。

絵画・イメージに関する研究の大略は、第一部の冒頭にある小峯和明氏の「絵巻・〈絵画物語〉論」から理解できる。小峯氏は、これまでの研究の経緯を示した上で、物語本文だけでなく絵画を読むことの重要性を強調し、物語本文と絵画の相関を捉えるものとして画中詞をあげる。また、絵巻を巻くという身体的動作や「写す」行為にも着目し、模写本の価値に言及する。最後には東アジアにも目を向け、中国の図巻などを含めた広い視野で研究を進める必要性を説いている。

本書は、四部からなっており、「第1部

物語をつむぎだす絵画」「第2部 社会をうつついだす絵画」「第3部 〈武〉の神話と物語」「第4部 絵画メディアの展開」とそれぞれ題されている。第一部は、絵画・イメージから物語を読むことがテーマである。第一部を読むことで、これを専門に研究していない人も、絵画を読むための多様な方法を窺い知ることができる。冒頭の小峯氏の論文の後、キャロライン・ヒラサワ氏は「光明真言功德絵詞(絵巻)」に描かれた光を、光明真言の功德を実感させるものと指摘している。塩川和広氏は「百鬼夜行絵巻」の魚介の妖怪から、食への意識と殺生の罪悪感、食べ物への供養を読む。吉橋さやか氏は『福富草紙』の脱糞譚を、『今昔物語集』巻二八などのラコ者の説話群の中に位置づけた。西山美香氏はコラムで『徒然草』第三二段の「跡まで見る人」の描かれ方の変化に、読者層の拡大を指摘する。

第二部は、絵画・イメージから物語内容だけでなく当時の社会を読むことをテーマとしている。ここから本書の読者は、絵画を読むことの重要性と可能性に気づくことができるだろう。山本聡美氏は「病草紙」

の二形(両性具有)から、二形や男巫を疎外し嘲笑する社会を見るとともに、性の越境者としての变成男子との接続も示した。阿部龍一氏は、「神泉祈雨」の善女龍王の善女とは小龍であり、真言の力である。「明」の象徴だとして、空海の真言宗の影響力を読む。吉原浩人氏は、飢人が被差別者として描かれる背景に、卑賤の貧者が文殊菩薩の化身かもしれないという文殊信仰を指摘する。高岸輝氏は、『看聞日記』の唐絵や唐物の記述から、それらが足利義教の権力の下で流行した様を読み解く。ヴェロニック・ペランジェ氏のコラムでは、フランス国立博物館における日本の絵巻類収集の経緯が紹介される。

第三部は、近世の(武)のイメージを絵画・イメージから読むことがテーマである。本書の読者は、絵画・イメージの享受者が自身の知識でそれらと対話する姿勢を知り、そこから見えてくる近世の(武)を学ぶことができるだろう山口眞琴氏は鳥津家「朝鮮虎狩図」が鳥津家の武功を示す性格を持つと読み、座して虎狩を眺望する図像は脱軍事合戦的であると指摘する。鈴木彰氏は根津美術館蔵「平家物語画帖」につい

て、白梅の枝と梶原景季・景時との連想が、享受者に要求されることを示し、絵や詞書と対話する享受者像を指摘する。出口久徳氏は小峯氏蔵「平家物語貼交屏風」の絵の特定を通して、他の物語や芸能等から蓄積された『平家物語』のイメージを読む。また、金英珠氏のコラムは『武家繁昌』から下剋上への警戒感を読み、ケラー・キンブロー氏は『鼠乃大江山絵巻』が酒吞童子を猫、頼光らを鼠とした面白さと、頼光と縁のある徳川家への皮肉を読んだ。

第四部は、絵画が建築物や動画等の多様なメディアに展開することを論じており、絵画研究の幅広さを知ることができる。伊藤信博氏は「掲鉢図」や「水陸齋図」が、日本の室町時代の異形の描き方に影響を与えたとした。宇野瑞木氏は社寺建築空間における二十四孝図について、空間を恒久的に演出するメディアの側面を指摘する。軍司直子氏は赤間神宮の平家一門肖像が、安徳天皇の木像を囲み、生前どおりに仕えるように配置された場であったことを示す。楊曉捷氏は「デジタル絵解き」やまんが訳等の新しい提案をし、教育分野での可能性を述べる。コラムとしては、安原眞琴氏の

が「扇の草子」翻訳本を紹介し、琴榮辰氏は鬼の角や人魚の尾鰭の「形」を切り口に地域や時代を超えて論じる。また、ゲン・ティ・ラン・アイン氏は肥前陶磁器の絵柄を読み、川鶴進一氏は教材としての『北野天神縁起』を論じた。

これらの研究を巡る本書は絵画・イメージの研究の展望を知るとともに、絵画・イメージに接する幅広い分野の研究の内容及手法をも知ることができる一冊である。多くの方に読まれることが期待される。

(二〇一七年十一月十日 笠間書院 A5
判 三四四頁 本体九、〇〇〇円)

(かわい めぐみ 本学大学院博士前期課程)

小峯和明監修・原克昭編

『シリーズ 日本文学の展望を拓く』
第三巻 宗教文芸の言説と環境

小柳 佳朗

本書は全五巻からなる「日本文学の展望を拓く」というシリーズの第三巻目にあたる。今日、日本文学の研究は国内外で取り組まれ、文学の周辺にある学術領域を広く取り込んで、より立体的な視座を獲得しつつある。多様な価値が混在する現代において、人文学としての文学は社会に対してどのような役割を担うのだろうか。本シリーズではこうした問題意識のもと、「東アジア」〔絵画・イメージ〕「宗教」〔文学史〕「資料学」という五つの視座を提示しており、第三巻目の本書では宗教に光を当てている。宗教と人間との関わりは、当然、一朝一夕に育まれたものではない。人文学としての日本文学の諸領域では、いわゆる古典文学をも宗教言説や信仰空間を育んできた一つの窓であると捉え、かねてから、宗教的な思想や信仰がいかに私たちの生活や思想に影響を与えてきたのかを研究対象として

きた。しかしながら、「仏教」や「神道」といった枠組みが依然として根強く、さらには近代的な宗教観の影響をも受けてしまふことから、その実体を掴みあぐねてきた。

宗教と信仰には必ず人間の営みを伴うという当たり前のことについて、私たちは忘れてがちである。宗教から縁遠くなりつつある現代人は、宗教と聞くと、つい難しい教理教学や、宗門教派などといったことを先に想起してしまい、どこか身構えてしまう。

しかし、大切なことは現代において宗教がたしかに私たちの生活と密接に関わっていることであり、そうである以上、当然、これまでも宗教と人々の生活は切り離すことのできないものであったということである。

したがってこれからの人文学としての日本文学研究は、時代や枠組みといったものに囚われずに、宗教にまつわるあらゆる言説や環境と運動させることが求められる。つまり、人が宗教とどのように関わってきたのかを、従来の枠にとられない、多角的な視点から見つめ返す必要があるということだ。

本書はそのような問題意識を抱きなが

ら、国や文化、学術領域の異なる論者たちによって様々な角度から解き明かされることよって、人々の営みからなる信仰世界をより立体的に把握することを目指したものである。

以下構成について簡略に示す。

本書は時代設定や、学問領域、宗教系統などにとらわれずに宗教文芸を捉えるため、全四部で構成されている。

第1部「宗教文芸の射程」では、全五編の論文を収録している。宗教文芸の位相に注目し、いわゆる「仏教文学」としてひとまとまりにされがちな宗教文芸に対して、多角的な視座と今後の研究の可能性を提示してくれる。

第2部「信仰空間の表現史」に収められる全六編の論文は、各時代の特定の宗教文芸テキスト解析を基盤に展開する。宗教や信仰がどのような論理や表現で語られていくのかに注目し、そのことを通して従来見えてこなかった新たな視座の獲得を目指すものである。

第3部「多元的実践の叡知」では、平安から近世への時代の変化に伴う宗教思想上の激動を、各時代の人々の、参詣、書写、

注釈などといった多岐にわたる営みから読み解くことで、生活や日々の営みがいかに宗教と密接にかかわりながら信仰空間を醸成していったのかを考察する全五編の論文とコラム一編を収めている。

第4部「聖地霊場の磁場」では、宗教文芸の実践や学術交流が行われた場としての宗教環境に焦点を当て、聖地霊場のもつ信仰の力を解き明かしていく論文三編とコラム二編を収めている。聖地霊場は、単にメッカとして信仰され、崇められるのみならず、時にそうした場が新たな文学作品を生み出したたり、時を隔てて後世の信仰や思想へと影響を与えていく新たな力をも内包している。

本書は初学者にとつても手に取りやすく、それでいながらも網羅的に文学研究の諸課題が収録されている。読者は、近年日本文学が豊かな国際性と学際性の中で多角的な視点からまなざされていることを改めて認識するとともに、日本文学の魅力を改めて体感することになるだろう。

(二〇一七年十一月十日 笠間書院 A5版 全三八六頁 本体九、〇〇〇円)

(こやなぎ よしあき 本学大学院博士前期課程)

小峯和明監修 宮腰直人編

『シリーズ 日本文学の展望を拓く』

第四巻 文学史の時空

齊藤 探花

今、文学史が変化の時を迎えている。時代の流れと共に作者や作品名を挙げていくような編年式の文学史を乗り越え、多種多様な観点から見つめ直されてきた文学史が、さらにこれからの時代へと動き出しつつある。その中で、『日本文学の展望を拓く』シリーズの第四巻目にあたる本書は、『文学史』をテーマに据え、二十二本の論文と七つのコラムを収めている。作品が享受されてきた時間。そして、作品の成立圏や作中の表現空間といった、作品内外に広がる空間。本書は、この時間と空間が交差する「時空」を鍵として新たな文学史構築への様々な道を示している。

まず第一部「文学史の領域」では、日本文学史の豊かな可能性を示す論が収録されている。小峯和明氏の論は「環境文学」を提唱することで、石牟礼道子や志村ふくみを始めとした近現代文学へも関心を拡げる

と同時に、自然科学や生命科学などの多様な領域から文学を捉えていく、広く豊かな研究方法を打ち出している。その後も、野中哲照氏による源氏物語の歴史との関連という観点からの見つめ直しや、杉山和也氏による日本文学史におけるキリシタン文学の位置づけなど、様々な日本文学史へのアプローチがなされる。また、明治期に着目した王成氏や谷山俊英氏らの論では近代へと繋がる古典といった、時代を跨ぐ論が展開されている。

第二部「和漢の才知と文学の交響」は、第一部に続き、日本文学の理解を深めつつも、和歌との関連に注目し、改めて日本文学の中にある精神を見つめ直す論が収録されている。加藤陸氏は、『浜松中納言物語』における中納言の、愛した女性を忘れないこと、思い出すということを「美質」と感じていた精神が同時代の歌人の中で共有されていたものであることを示し、陳燕氏は、嫉妬を軸に据えて時代を跨ぎながら論を展開し、作者である道綱母が日記という形態を選んだ理由に考えを巡らせた。

第三部「都市と地域の文化的時空」では、都市や地域といった享受環境の変化と

連動し、姿を変えていく古典文学の一面に光を当てた論が収録されている。深沢徹氏の提起した「都市表象史」の論から始まり、宮腰直人氏は東北の語り物文芸である奥浄瑠璃と古浄瑠璃の享受を南奥羽地域の環境そのものについて考えを巡らすことで、鈴木彰氏は、平将門のイメージの変化を成田山新勝寺の動きを追っていくことで、その変化を示した。そして作品の変化を考える上では、作品を取り巻く環境、そして享受者の存在が欠かせないことを示している。

第四部「文化学としての日本文学」では、世界の文学へと羽ばたく。他国の文学作品との比較が、新たな視点から自国の作品を見つめ直すきっかけとなることを伝えると同時に、文化学との接点を見つめる論が収録されている。クレール・碧子・ブリッセ氏は、『平家物語』の語りについて、『イリアス』『オデュッセイア』などの他国の作品と比較し、これまで多く研究されてきた語りがまだ持つ可能性を示している。ニコラエ・ラルカ氏は、『浦島太郎』をルーマニアの不老不死説話と比較し、さらに志村真幸氏は、南方熊楠論文をイギリスと比

較する。南方熊楠論としては、松井竜五氏の論や田村義也氏のコラムにおいても新たな可能性を切り拓いている。そして最後に、ツベタナ・クリステワ氏のコラムでは、文学史を書くということ、そして「日本文学」なるものの内実が再度問い直され、これからの文学史について次のように語られている。

狙うべきなのは、理想の『日本文学史』ではなく、二十一世紀の初めの「今」に相応しい『日本文学史』なのではないだろうか。「今」だから見えてきたこと、「今」だから言えること、言わなければならないことをまとめた『日本文学史』。

本書を貫くものは、自国だけに留まらずに、作品を通して過去と対話すること。「今」へと繋がって行く文学研究への志向であろう。本書は、自分の見知らぬ時間や空間の作品と向き合うことで、実は今生きている我々も、そして未来の人々も、その作品が「つむぎだす歴史の一部となっていることを教えてくれる一冊である。」

(二〇一七年十一月 笠間書院 四六〇頁
本体九、〇〇〇円)

(さいとう たか 本学大学院博士前期課程)

小峯和明監修・目黒将史編

『シリーズ 日本文学の展望を拓く』

第五巻 資料学の現在』

本山 八重子

本巻は、「日本文学の展望を拓く」シリーズの第五巻で、気鋭の研究者一六人の論文を収録し、全三部から成っている。文字通り最先端の「資料学の現在」を知る上で必読の書である。第1部から第3部まで、各論文の簡潔な紹介を試みたい。

第1部「資料学を〈拓く〉」は五本の論文で構成される。小峯和明論文では、「説話」学の第一の極を昔話や伝説、世間話などの口承文芸の総称とし、第二の極を文字テキストとしての説話集形態とし、速記本や口述筆記本を新たに〈説話本〉と呼ぶことを提起し、和芸を含めて第三の極と位置付ける。(説話本)の概念を具体化する資料として、明治一六(一八八二)年に浄土真宗の僧侶・北畠道龍の最初期のインド行仏蹟巡礼の講演筆録『印度紀行釈尊慕況説話筆記』を翻刻、紹介し、さらなる追跡を期待させる。鈴木彰論文では、鹿児島県

歴史資料センター黎明館寄託・個人蔵『武家物語絵巻』をお伽草子『土蜘蛛』の一伝本であると認定し、名称を『土蜘蛛』とするよう提言する。詞書を翻刻し、挿絵も含めて慶応義塾図書館蔵『土くも』との異同を詳細に分析し、同系統の諸本が伝播していた状況及び絵巻作成が広範囲の時空間で行われていたことを指摘して、資料伝来の構図の解明を試みる。そのためには資料を所蔵する文庫の全体像を捉える必要があると説く。桑汐里論文では、新出の国文学研究資料館蔵『大橋の中將』を翻刻・解題している。『大橋の中將』は、早い段階で出版された古浄瑠璃の正本、絵入り写本、扇面絵が残されているが、お伽草子の伝本が端本ばかりであったため、作品の成立背景、お伽草子と古浄瑠璃の本文関係など基礎的な研究がなされてこなかったという。新出の国文研本は欠けている箇所はあるが、上・下巻の揃いで、挿絵も多く細部が正確に描写されているので、『大橋の中將』の作品研究、絵画的受容の解明の足がかりになるとしている。大貫真実論文では、立教大学図書館蔵『安珍清姫絵巻』を翻刻・紹介している。この立教本は、道成寺

本と、その道成寺本の構成に沿った『道成寺縁起絵とき手文』に類した本文を組み合わせた内容になっているが、各本文を詳細に比較して、立教本の独自表現を明らかにし、絵解き台本が他にも存在していた可能性を示す。また、立教本には予め設けられた空欄に別筆の書き込みがあることに着目し、その理由を解き明かしている。蔡穗玲論文では、中国で著された仏教典籍である『如来在金棺囑累清浄莊嚴敬福經』の新出本文を紹介する。同本文は、ハイデルベルク人文科学研究院の中国仏教石経プロジェクトによる陝西省麟游縣慈善寺石刻本の調査で発見されたもので、新たな三つの見識が提示されている。

第2部「資料生成の(場)と(伝播)」をめぐっては六本の論文で構成される。中根千絵論文は、名古屋大学蔵本『百因縁集』を翻刻・紹介する。同本の成り立ちを解明するため、その序文、跋文を分析し、また、『今昔物語集』と共通する話を比較・検討し、禅宗圏で成立した『百因縁集』が宗派を超えて日蓮宗の談義所でも用いられていた可能性を展望している。高橋悠介論文は、金沢文庫発祥の寺である称名寺に伝来する

二系統の神祇書『諸社口決』を整理する過程で、新出の断簡を発見し、翻刻・検討した結果、社参作法が伊勢菴頂の作法と概念に共通する要素が多いことが判明する。そのため、僧侶社参の作法と観念の成立・展開を明らかとする重要な資料であり、また、中世日本紀や中世の神仏説話の生成背景を解明する資料であると分析している。渡辺匡一論文は、福島県いわき市遠野町にある真言宗智山派の古刹、圓通寺所蔵の『血脈鈔』の翻刻・紹介である。圓通寺本の目的は、醍醐三宝流(小野流)の正嫡が地藏院流とともに、松橋流が正当な後継者であると宣言することにあつたとし、室町時代中期における醍醐寺諸流派の活動や松橋流の東国伝播の動向を明らかにする重要な典籍と位置付けている。柴佳世乃論文は、唱導で名高い安居院澄憲の『如意輪講式』を翻刻・訓読して、どのように聴かせるか十分に計算し尽くされた対句から成る美文で構成された特徴を捉え、講式を文字資料として味わうのではなく、音声言語として詠唱することにより、聴聞者の感動を誘う意義を明らかにしている。和田琢磨論文は、室町時代における『太平記』享受の一例とし

て、守護大名今川氏親の『太平記』観を、岳父である中御門宣胤の日記『宣胤卿記』の記述を通して解明する。従来の研究史では、氏親は、『太平記』に今川氏の活躍場面が少なすぎるとして足利幕府による改訂を望んでいたと解釈されてきた。しかし、著者は、宣胤が氏親に送った「太平記抜書一書」及び氏親の礼状（日記に所載）の内容を予見なく読み解いて、全く新たな結論を鮮やかに導き出す。同時に、先学の第一人者でも落ち入る、推論を導き出す際の資料を扱う盲点も提示している。目黒将史論文は、江戸中期以降誕生し、多種多様に流布・享受されている異国合戦軍記を、「体験記から覚え書きを経て成立した物語群」と定義する。その中で、一系統の軍記である（薩琉軍記）の成立年次を比定し、『平家物語』や『太平記』のように史書として享受・流布された様相を繙く。その下支えとなった基盤は、徳川幕府の領土確定政策の浸透した社会構造であるという。また、近松浄瑠璃と異国合戦軍記の展開の様相が重複する構図を明らかにし、総合的な江戸文芸作品の比較分析の必要性を説いている。

第3部「資料を受け継ぐ（担い手）たち」は、五本の論文で構成される。小此木敏明論文は、琉球最初の史書である『中山世鑑』の伝本とそれにまつわる問題を、明治政府の外交政策を視野に入れながら、詳細に検討・整理し、不明確であった底本・参照本の成立過程を明らかにする。同時に、明治政府による琉球の資料の収集・利用の実態を検討する必要性を説く。伊藤慎吾論文では、国文学者であり出版人でもある横山重が、民俗学者である南方熊楠に与えた学問的影響を、横山が熊楠に宛てた書簡を通して考察する。『室町時代物語集』の編纂・刊行にあたり、横山はお伽草子に関する最先端の資料・情報を集め、熊楠に提供し、お伽草子が文学ジャンルとして説話文学に匹敵する話材の豊富さを持つことを熊楠に認識させる。今日のお伽草子研究の資料的基礎を築くことができたのは横山の功績であるとする。山田洋嗣論文は南部家旧蔵群書類従本『散木奇歌集』に付された頭書を翻刻し、今は所在不明になっている「小山田与清手沢群書類従本」の頭書の作業過程が同本に残されていることに着目する。これは、近世後期の江戸における『散

木奇歌集』の読解そのものと読解における興味のある方や方法を明らかにし、今後の読解の助けにもなるとする。渡辺麻里子論文は、弘前藩主や弘前藩の藩校「稽古館」の旧蔵書に着目し、弘前の知の体系を検討する。現在の所蔵は東奥義塾高校であるが、その中に藩主の所持本とみなされる「奥文庫」という蔵書印が押された本が大量に混在しており、明版を含む大量の漢籍の中で、入手困難な『文献通考』に注目して蔵書の意義を検討する。また、奥文庫本には『御歌書』と装丁された二十二冊の和歌関係書も含まれる。著者は『土佐日記』及び、『宝積経要品』の紙背文書である『金剛三昧院奉納和歌』の写しが歌書として分類・蔵書されている理由の解明の必要性など今後の研究課題を指摘する。グエン・ティ・オウイン論文は、表記文字として長年漢字を使用してきたベトナムが保有する大量の世界的価値を有する漢字・字喃の古典籍を扱う上での問題点を喚起する。植民地時代に混乱を来した資料を選別する、信頼できる底本の選定と書誌学・資料学の確立が今後の課題であると提言している。

知と学の体系を検証する「資料学」抜き

に、文学研究の未来はないと、読者に認識させる必読の一冊である。

(二〇一七年十一月一日 笠間書院 A
5判 四〇二頁 本体九、〇〇〇円)

(もとやま やえこ 本学大学院博士後期課程)

ポドメール美術館所蔵
小峯和明・金英順・目黒将史編

『奈良絵本 釈迦の本地
原色影印・翻刻・注解』

大竹 明香

本書は、仏伝を物語化し、極彩色の挿絵とともに描いた、スイス・ジュネーブのポドメール美術館蔵・奈良絵本『釈迦の本地』を、翻刻、注解とともに紹介するものである。

仏伝とは、仏教を創始した釈迦の一代記のことである。仏伝は、『過去現在因果経』『仏本行集経』などの漢訳された経典としてひろまった。この仏伝は、東アジアをはじめ広く流布し、継承されるとともに、地域や時代に合わせて編み直され、変容していくという特徴を持つ。このように、仏伝が変容していくなかで作品が制作されるわけであるが、日本における中世期に制作された『釈迦の本地』も、まさしくその特徴を表しているものである。

『釈迦の本地』の特色は、ひとつには、釈迦の一代記が仏典から離れ、和文脈の中で語られることである。日本の中世期にお

いて、仏伝が物語化されるという変容を遂げたのである。くわえてもうひとつの特色は、絵巻や絵入り本が多く制作されるという、絵画との結びつきである。

このように、『釈迦の本地』は絵巻や絵入り本が数多く作られ、後世にも享受された。小峯和明氏の解説によると、諸本と比較しても、ポドメール美術館所蔵『釈迦の本地』(以下、ポドメール本)は、「本文、挿絵ともに他に類のない特異な伝本として注目され」という。以下、本書の内容を大まかに紹介したい。

影印・翻刻では、ポドメール本の書誌を示し、続いて、詞書部分、絵画部分上巻、下巻の原色影印と翻刻の全文を載せる。見開きページ上段に影印、下段に詞書の翻刻を載せており、影印と翻刻を対照させながら作品を読むことができる。また、絵画部分にはそれぞれに場面解説が附されている。各ページを使用し掲載されている絵画部分は、ポドメール本の極彩色で描かれていることが見て取れる。

目黒将史氏と金英順氏による釈文・語注では、ポドメール本上巻、下巻の釈文と、詳細な語注が施されている。語注では、ポ

ドメール本と寛永二十年刊本（『室町時代物語大成』所収。赤木文庫本）との校合を行い、その他諸本も参考する。たとえば、『ボドメール本下巻一』、「降魔成道」で、釈迦が草刈り人に変化した帝釈天に名を尋ねるくだりに、「きんしやう草」とある。

語注では、この「きんしやう草」は「吉祥草のことか」とし、寛永二十年刊本や『通俗釈尊伝記』『釈迦出世本懐伝記』などの該当箇所を示す。このような語注をとおして、ボドメール本の詞書本文の特徴を理解しながら、作品を鑑賞することができる。

ボドメール本の特異性については、小峯和明氏の解説に詳しい。この解説では、ボドメール本にはいくつかの独自文があることが指摘されている。たとえば、「提婆達多らとの技芸比べ」（解説中に示された物語展開の箇条書き部による）の場面では、ボドメール本とスペインサー本のように、提婆達多の登場と紹介の錯簡が見られ、またボドメール本では当該場面は、提婆達多が象に向かつて拳をあげている様が絵画化されている。このような絵はボドメール本と、時代が下った葛飾北斎の作品のみに見られるもので、さらには、ボドメール本では提

婆達多が、南蛮屏風に描かれる西洋人風の装束を身に纏った姿で描かれており、これについては、制作当時のキリシタンと仏教とのかわりから読み解くことが出来る」と、小峯和明氏は指摘する。

以上、本書の内容を大まかに述べてきた。小峯氏はボドメール本について、「天台法華系の一般的な伝本からすれば、浄土教系の教学に立脚する本文改編を施した異本に位置づけてもよいだろう」と、その特異性について言及する。詞書、絵画部分、それぞれに特異性を持つボドメール本を、本書では詳細に紹介、解説する。ぜひ多くの方に本書に触れていただきたい。

（二〇一八年五月一日 勉誠出版 A4判 一六八頁 本体一六、〇〇〇円（税別）

（おおたけ あかり 本学大学院博士後期課程）